

報告事項セ

とっとり弥生の王国シンポジウム「倭人の真実」について

とっとり弥生の王国シンポジウム「倭人の真実」について、別紙のとおり報告します。

平成31年3月15日

鳥取県教育委員会教育長 山本仁志

## 第3回とっとり弥生の王国シンポジウム「倭人の真実」の開催について

平成31年 3月15日  
文化財課

埋蔵文化財センターが主催した第3回とっとり弥生の王国シンポジウム「倭人の真実」で、現在、国立科学博物館、国立歴史民俗博物館及び鳥取県埋蔵文化財センターが共同で行っている、青谷上寺地遺跡出土人骨のDNA分析の成果、さらに考古学、年代学、古環境学などの研究成果をもとに、青谷上寺地遺跡から発見された人々が暮らしていた時代、環境に関する最新の研究成果を一般向けに紹介しました。



1 日時 3月2日(土)  
午後0時50分から午後4時30分まで

2 場所 とりぎん文化会館小ホール

### 3 出演者

〔記念講演〕

篠田謙一(国立科学博物館 副館長・人類研究部長) 「DNAが語る青谷の弥生人」

安 昭炫 アン ソヒョン 国立慶州文化財研究所 特別研究員) 「青谷上寺地遺跡の弥生人をとりまく古環境」

〔パネルディスカッション〕

パネリスト: 藤尾慎一郎(国立歴史民俗博物館 教授)、篠田謙一、安 昭炫

コーディネーター: 濱田竜彦(鳥取県埋蔵文化財センター 青谷上寺地遺跡調査整備担当係長)

4 参加者 430名

### 5 記念講演・パネルディスカッションのポイント

#### 核DNAの分析について

- ・男性5体、女性1体を分析。脳が残っていた男性の上顎に最も多くの核DNAが残存(約40%)。
- ・男性4体のY染色体DNAが得られた。父系については3体が縄文系、1体は渡来系。
- ・6体の遺伝的特徴は北部九州の渡来系弥生人と同様に現代日本人の範疇に収まる。
- ・今後、引き続きゲノム分析を進め、混血に関する詳細や個体の形質等を検討していく必要あり。

#### 人骨の年代について

- ・最新の年代測定により、2世紀後半(倭国大乱の時代)の人骨である可能性が高まった。

#### 2世紀における青谷上寺地遺跡の環境について

- ・花粉の分析により、現在よりも、やや冷涼な環境にあったことが指摘された。
- ・低地にはスギ、丘陵部にはカシに代表される広葉樹の森林があり、重要な森林資源となっていた。

#### 交流について

- ・出土品からも韓半島南部等との交流がうかがわれる。
- ・ミトコンドリア、核DNA共にみられる多様性は青谷上寺地遺跡が交流の拠点であったことを示す。

\* 青谷上寺地遺跡出土人骨の正確な評価を得るためには、新たな解析や他事例との比較検討が必要。H31年度以降は、国の科学研究費による日本列島人の成立をさぐる研究プロジェクトの中で、他の地域、時代の遺跡出土人骨の分析もスタートするため、全体計画の中での作業量と事業費の調整が必要。4月以降の分析スケジュール、研究の進捗等は未定。

### 6 その他

2月28日(木)に、上記シンポジウムの講師である安 昭炫(アン ソヒョン)特別研究員が所属する国立慶州文化財研究所の李 鍾勳(イ ジョンフン)所長を埋蔵文化財センターにお招きし、両所の友好交流及び協力に関する協定を締結。今後、両所間での学術研究交流を推進。